

九六一年 陳香鐵民校注)を参考に記した。

(7)『詩經』鄭風「風雨」の詩に聞こえる鶏の鳴き声は、『毛伝』では不吉な象徴と解されるが、朱熹の『詩集伝』では、男女の恋愛の象徴として解されている。

## 梅堯臣「魯山山行」：読後の違和感から始まる逐句的考察

千葉 貴

### 一 はじめに

演習で梅堯臣「魯山山行」を読んで私が最初に感じたこととして、①この詩は何か不安定な感じ(おさまりが悪い感じ)がするということ、その他、部分的なものとして②歐陽脩「遠山」詩と類似性を有すること、③第五句「熊」は奇想ではないかということ、等があった。これらのことを考え合わせつつ、「魯山山行」詩を考察していく。

なお、逐句的考察という手法をとった理由としては、上記①にも関連するが、この詩全体を通ずるものが見えなかったことと、詩を全体的に解釈する手法がわからなかったことが挙げられる。以下引用文献の著者と演習参加者とは呼称(氏)の有無で区別する。

### 二 第一句について 疑問①と関連して

まず、第一句、「適與野情愜」について考える。これは、「たまたま(もしくは、まさに)野情とかなう」と訓ぜられ、「ちょうど自然を愛するわたしの心にぴった<sup>①</sup>りだ。」、「野趣を好むわがこころとまさに合致して<sup>②</sup>」などと訳される。訳はまさにその通りであろう。

しかし、私はこの句に違和感を覚えた。

一つには、白井も感じていたことだが、梅堯臣とこの句とがなにかそぐわない感じがしたためである。「彼は地方官として、転任のたびごとに、各地を旅行したのだが、そのわりに人間を離れた自然をうたった詩が少ない。『魯山山行』(三五ページ)のような詩はまれである。」<sup>(3)</sup>という笈氏の考察は、詳しく検証はしていないが、正しいと感ぜられる。自然をうたう詩が少ないからといって、梅堯臣に「野情」がないとはいえないが、この詩人とこの句が私の中では結びつかないのである。

二つには、中国の古典詩で、「ちようど自然を愛する私の心とびつたりだ。」と宣言するような句はあまりないように思われたためである。作者にとつて好ましい風景が描写されていることで、読者が、作者の自然への愛なり野趣なりを感じとる形になる、という詩が多いのではないだろうか。

かかる疑問を念頭におきつつ、この第一句について考える。私は第一句がこの詩全体に対し、強い影響力をもっていること、ならびに第一句に述べられ、詩全体を貫く「野情」は一般的な用法を超えたもので梅堯臣の主観が強く反映しているということを主張する。

宇都は「野情」について、辞書にある意味(客観的、普遍的意味といえよう)を調べた上で、「魯山山行」においては、「作者の『野情』が詩全体を包み込んでいる」、と結論づけている。「魯山山行」第一句の「野情」が、詩全体を支配すると主張し、「野情」は、普遍的な情緒である以上に、作者自身の情緒であると捉えている。私はこの結論についてはこれを支持する。

私の主張ならびに宇都の結論のうち、第一句が詩全体を支配している、ということについて、第一句の内容、位置づけからの根拠を挙げる。

①第一句が主張の強さ・感情の表出の程度において詩の他の句に比べて際立っていること。②副詞「適」は、この字自体でも「かなう」という意味を持つ語であるが、それが強調として使われ、「まさに、ぴつたりだ」と二重に主

張しているということ。③第一句と第二句との関係性が薄いということ。このことは第一句が第二句とのみ関連を有するものではないということを示している。以上三点により、第一句で打ちだされた「野情」は他の句にも強い影響力を有するということは解釈として成立しうる。

次に、「野情」に梅堯臣の主観が反映しているということの根拠として、「野情」の内容からの検討を挙げる。

宇都は辞書の記述を総合し、「野情」を「世事や他者の干渉に煩わされない、世俗外ののんびりとした情趣」（漢語大詞典による）と結論づけている。寛氏注では「自然を愛する心」、前野氏訳では「野趣」と考えている。注や訳としては寛氏注、前野氏訳が必要かつ十分であると考ええる。

しかし、「魯山山行」における「野情」の意味は、かかる辞書的な、即ち客観的、普遍的な意味に留まるものではないと考える。上で見たように、第一句が強い主張であり、二重の強調である以上、「野情」は彼自身の主観を強く反映しているといえる。前掲の寛氏注、前野氏訳でも、単なる自然を愛する心、野趣である以上に、「『わたしの心』、『わが』ころ」と述べている。

「魯山山行」詩全体を眺めるに、わかりやすく魯山の野趣が表現された詩であるとは感じられない。そのように表現するのであれば、例えば「好峰」がどう「好」なのか、「幽徑」がいかなる様子なのか、が具体的に感じられる詩になっていてよいはずである。つまりこの詩に見られる「野情」は梅堯臣の主観を反映した個人的感情であって、何の問題もなく一般的な意味のまま受け入れることはできないと思う。

この点が当初感じたおさまりの悪さの一因に思える。「魯山山行」は確かに詩人が好んで選択する題材の一つである「人間を離れた自然」（前掲寛氏解説）をうたつてはいるものの、その自然とは、後で見えていくが、表現という点から考えると、一般に共有しうるような先行するイメージをもつ語をそのまま使用することが少なく、華麗な修辞も鋭敏な表現もない。名詩かどうかという形で評価するには、そのための評価の基準を設定しづらいように思う。

## 三 第二句、第三句、第四句について 疑問②と関連して

これらの三句についての考察を加えるうえで、まず、首聯と頷聯とに分けて検討しなかった理由を述べる。

理由の一つは詩の解釈の問題である。前述のように、第一句と第二句とを内容的に関連させるのは難しいように思われる。「千山高復低」は「適與野情愜」と結びつくよりも、「好峰隨處改」と結びつくほうが自然ではないだろうか。

二つ目の理由は、冒頭にも挙げた、「魯山山行」詩と欧陽脩の「遠山」詩の類似、そして両者に共通する特徴にある。「遠山」詩と第三句には関連があり、その関連性は第二句から第四句までに影響していると考えるので、この三句を一つとして検討する。

まず「遠山」を挙げる。

山色無遠近 看山終日行 峰巒隨處改 行客不知名

山色に遠近無し／山を看て終日行く／峰と巒とは處に隨いて改まり／行客 名を知らず

（山の様子には遠いも近いもない／山を見ながら一日中歩き続ける／山は先の尖った形になったり先の丸い形になったり、見ている者が場所をかえればそれに従って変化する／旅人は山の名前も知らない。）

この詩の第三句と「魯山山行」の第三句はかなり似ている。梅堯臣と欧陽脩の交友関係の深さ、句の類似性から見るに、この二つの詩には関係があるとみてよいと考える。製作年は「遠山」は景祐元年（一〇三四）<sup>(4)</sup>、「魯山山行」は康定元年（一〇四〇）<sup>(5)</sup>ということなので、梅堯臣が欧陽脩の「遠山」を参考にしたとみてよいであろう。したがって、「魯山山行」を解釈する一つの材料として、ここで「遠山」を検討したい。

まず、「山色」は山の様子、姿と訳しておく。

第三句、「峰巒」は、「やまやま」、「みねみね」ではなく、「峰（先の尖った山）」と巒（先の丸い山）」と捉える。

欧陽脩の詩に山をよむものは多いが、「山々、峰々」を意味する表現としては、（選集の範囲内ではあるが）「千峰、群

峰、層巒」などは見受けられるが、「峰巒」という用法は無かった。また、もし目を引かれるような峰々を持つ山であつては、この詩の山にふさわしくないとと思われるからである。第四句「不知名」とは、みるべきところもない無名の山であろう。

その上でこの詩を考察すると、第三句は、第一句、第二句で描かれた、恐らくはぼんやりとした山の様子を、見ているこちらの位置が変わると先が尖つた山（峰）になつたり先の丸い山（巒）になつたりする、ということ、形という点から分析・把握しようとする過程であると考ええる。

戸倉英美氏「風景の誕生とその崩壊―文学表現から見た自然の見方の変化」<sup>(6)</sup>も、「遠山」について、「作者が試みるのは山をもう一度分類しようとする事」、「事物が訴えかけてくるものはイメージのみにはおさまらない。そのおさまりに足りないものを表現する試みが『峰』と『巒』であり……」、と述べている。

「遠山」があいまいなイメージを、形を分析的に見る視点から捉え直そうと試みた詩であるという点では私と上掲論文は一致している。しかし、戸倉からは「対象を独立峰と考えるのであればそれは違う」との指摘を受けた。「連続した山並を一つの山とするなら対象は一つといつてもよいが、一日中歩いているのであるから、歩くにつれ峰や巒が次々に現れる光景、と考えるべきではないか。」ということである。

確かに私は対象を独立峰と考えていた。その点についての不自然さは指摘の通りである。第一句、第二句での対象は山並であると考えるべきであろう。しかし、第三句の段階では対象はやはりある一峰に限定されるものと考えたい。そのほうがあいまいなイメージから分析・把握へと至る、転句の落差、意識の変化がより明確に感じられるように思う。しかし自分の解釈について現時点では根拠が提示できない。この詩の解釈については課題としたい。

第四句、「不知名」について考えるに、この山は、みるべきところもない無名の山であるか、あるいは名山であつても、その美しさを欧陽脩が捨象してしまつた山であろう。そうすることで、山を見て考えたこと、彼の知的認識過

程という主題を明確にすることを意図したのではないだろうか。

つまり、「遠山」という詩は、山そのものを描いた詩というよりは、作者の位置によって山の姿が変化することの発見と、印象を具体的なものとして把握しようと試みる思考過程とを表現した詩と捉え得る。

では、かかる「遠山」詩を、梅堯臣はどう「魯山山行」詩に生かしたのだろうか。まず第二句、第三句との比較から見る。

#### 千山高復低 好峰隨處改

まず、千山と好峰とは同一でないと考える。理由は、①両者を同一と考ええると、情景描写が単調となり、変化をうたう両句全体と調和しないように思えること。②第二句から第四句の流れから見ると、この両句は周囲全体からそのうちの一部へと見る対象が絞られている描写であると、つまり、ある一峰がそれを見る位置によって姿を変えようと思いたいのである。

この点についても、戸倉から「遠山」詩と同様の指摘を受けた。「歩みにつれて山々は高く低く、好ましい峰々が次々に姿を変えて現れる、と読める」と。私にもそのほうが自然な解釈であると感じられる。しかし、第三句と第四句の対句について、私は両句の対偶性を明確に意識しながら解釈したいと考えている。従って、第三句が第二句と一体となりつつ第四句と対になる、と感じられることのないような解釈を第二句と第三句について施すべきではないかと考えている。当然この解釈も、第二句と第三句との関連性を否定するものではない。「遠山」詩の解釈と同様に考えて、上記②のようにこの両句を解釈したい。

次に、「遠山」詩との関連を含めて、第三句、第四句を考える。

第三句と第四句の対句については、対象となる風景の対偶性に注目したい。形の好い峰という見通しのよい景色と対になっているのは薄暗い小道である。前者は魯山の外部にある景色であり、後者は魯山内部の景色である。この両

者は魯山内部にある視点からの描写という点では統一されている。

この視点は、「山行」、山歩きによつて移動している。そして視点が移動した結果として、第三句は「隨處改」で客体の変化が表現され、それに対して第四句では「獨行迷」で主体の側の状況変化が描写されている。

第二句から第四句までをまとめる。

視点を移動させることとそれに伴う情景描写は第二句から第四句までに共通したものであり、恐らくは「遠山」からとりいれたものである。見る者の位置が変わると景色も変わるといふ発想である。

上の発想を基調にしつつ、魯山の周囲から魯山内部の光景へと描写を行っている。周囲の情景では多くの山々からそのうちの一峰へと対象が移つてゆく過程が描かれる。そして外部の情景と対比する形で魯山内部の山道が描かれ、対句の中で、見る者の位置が変わること、即ち、見ている主体の側の変化に意識を向けた表現がなされる。

#### 四 第五句、第六句について

第五句、第六句について考える。中国の古典詩に熊がでてくることは珍しいのではないかとということで、演習においても最初に議論になったところである。

まず、荒木が生物としての熊を調べた。案外獠猛ではなく、中国では滅多にあえない生物だという。同時に、熊がでてくる詩を馬場、安西が調べた。

唐・宋詩の熊について、演習では李商隱の「過故府中武威公交城舊莊感事（故府中 武威公の交城舊莊を過りて事に感ず）」、温庭筠の「題谷隱蘭若（谷隱の蘭若に題す）」、陸游の「感舊」を読んだ。<sup>7</sup>「魯山山行」との比較のために次に掲げる。

#### 《李商隱「過故府中武威公交城舊莊感事」》

信陵亭館接郊畿 幽象遙通晉水祠 日落高門喧燕雀 風飄大樹撼熊羆 新蒲似筆思投日 芳草如茵憶吐時 山下

祇今黃絹字 淚痕猶墮六州兒

信陵の亭館は郊畿に接し／幽象は遙かに晉水の祠に通ず／日落ちて高門に燕雀喧しく／風飄りて熊羆大樹を撼す／新蒲 筆に似て投げし日を思い／芳草 茵の如くして吐きし時を思う／山下 祇今 黃絹の字／淚痕 猶ほ墮つ六州の兒。

（信陵君のようだったあなたのお邸は太原府の郊外に接していて／幽遠な景色は遠く晉祠にまでつながっていました。／今や日が落ちればお邸の高い門には燕雀がやかましいありさま／風がひるがえり大樹を熊羆が揺り動かします（大樹將軍のようなあなたは兵士達の心を動かし、慕われていました）／春、芽生えたばかりの蒲は筆のようで、筆を投じてあなたの幕下に参じた日が思われ／よい香りの草は敷物のようで、敷物に粗相をしても許してくれたようなあなたの高恩が偲ばれます／今でも山の麓にはあなたの碑が立っています／その碑を見ると幕下にあった河北の兵士達は涙の痕を再び濡らさずにはいられません。）

《溫庭筠「題合隱蘭若」》

風帶巢熊拗木聲 老僧相引入雲行 半坡新路畬纔了 一谷寒烟燒不成

風は巢熊の木を拗るの聲を運び／老僧相い引きて雲に入りて行く／半坡の新路畬纔かに了り／一谷の寒烟 焼けども成らず。

（風は巢籠りしようとしている熊が樹をねじり折る音を伴い／老僧は相連れ立って雲の中へと入ってゆく／斜面の半ばに新しい道があるのは焼畑がやっと終わったばかりだからで／谷いっぱい寒々としたもやは焼畑でできたものではない。）

《陸游「感舊」》

要識梁州遠 南山在眼邊 霜郊熊撲樹 雪路馬蒙氈 慘淡遺壇側 蕭條古廟壩 百詩猶可想 歎息遂無傳



識るを要す梁州は遠くして／南山は眼邊に在るを／霜郊に熊は樹を撲ち／雪路に馬は氈を蒙る／慘淡たり遺壇の側／蕭條たり古廟の塙／百詩猶お想うべし／歎息す遂に傳わる無きを。

（故郷の紹興からは）梁州は遠く／終南山は目の前にあるということとは知っておくべきだ／霜の降りた郊外では熊が樹を撲ち／雪の積もった道では馬もフェルトの毛織物を背にかけ、荷を引いて行く／むかし韓信を拝したという壇のまわりは凄然としており／諸葛武侯祠のまわりはものさびしい／（水に落としてしまった；陸游の自注による）百篇の山南雜詩のことはいまも懐かしい／あれが世に伝わることがないと思うとため息がでる。

李商隱詩では、熊は熊羆、すなわち勇敢な兵士のイメージと、荒れ果てた土地のイメージとを持っている。温庭筠詩からは、山奥のものさびしいイメージが浮かび上がる。陸游詩では、荒れ果てた土地のイメージとともに、当時金と対峙する最前線にあつた南鄭の軍事的な緊張感も読み取ることができる。これは過去のイメージが現れた一例といえるのではないか。

熊に配されている鹿はどうか。小山が調べた。小山のレポートにない例として、演習で検討した温庭筠の、「早秋山居」と「宿雲際寺」とを挙げる。この二首の解釈は遠藤が担当した。

### 《早秋山居》

山近覺寒早 草堂霜氣晴 樹凋窗有日 池滴水無聲 果落見猿過 葉乾聞鹿行 素琴機慮靜 空伴夜泉清  
山近くして寒早きを覺え／草堂 霜氣晴る／樹凋みて窓に日有り／池に水滴ちて聲無し／果落ちて猿の過ぎるを見／葉乾きて鹿の行くを聞く／素琴 機慮静まり／空しく夜泉を伴いて清らかなり。

（まだ秋の始めだというのに）山が近いので、寒さを覚えるのが早い／私の住んでいるこの草堂は骨を刺すように寒く、空は晴れ渡っている／樹々は枯れしぼんで窓には日が当たっており／池には水が満ち満ちており、音ひとつたてない／（樹になった）果実が落ちる音がしたので、そちらを見ると猿が通り過ぎていくところであり／

地に落ちた木の葉は乾いているので、鹿の動くかさかさという音が聞こえてくる／質素な飾りのない琴を弾いて思慮をしずめる／（琴の音は）うつろに夜の泉の音を伴って清らかである。

《「宿雲際寺」》

白蓋微雲一径深 東峯弟子遠相尋 蒼苔路熟僧歸寺 紅葉聲乾鹿在林 高閣清香生靜境 夜堂疎磬發禪心 自從紫桂巖前別 不見南能直至今

白蓋微雲一径深く／東峯 弟子 遠く相い尋ぬ／蒼苔の路に熟して僧は寺に歸り／紅葉の聲乾きて鹿は林に在り／高閣の清香は靜境を生じ／夜堂の疎磬に禪心發す／紫桂と巖前に別れて自從り／南能に見えずして直ちに今に至る。

（白蓋峰にはうっすらと雲がかかっており／一本の小道が奥深く続いている／仏教に帰依した私は、この東の峰をはるばると尋ねて来たのだ／蒼い苔の生えた山道を僧は慣れた足取りで寺に歸る／紅葉の景色のなか、落ち葉を踏む乾いた音が響き渡って鹿が林にいることがわかる／たかどので焚かれた清らかなお香が静かな境地を生じさせ／夜のお堂からはまばらなうちいしの音が響いて、悟りの念を起こさせる／寺の境内に生えた紫色のもくせい（紫桂の解釈については疑問が解決できなかった。）と、大きな巖の前で別れてよりこのかた／私はただ今に至るまで、南宗の慧能のようなすばらしい人物にお会いしていない。）

この二首での鹿は、いずれも落ち葉をふむ足音が描写されている点が特徴的である。山の中の自然そのままを描いているといえよう。

これらの、先行する熊や鹿を使用した詩と「魯山山行」とを比較する。熊は詩に登場することが少ない動物である。登場する場合でも、先行する文学作品から来る何らかのイメージを伴っていることが多い。それに対して、「魯山山行」の熊は、野生動物という以外には特にイメージが浮かばない。

熊の描写について、大山は升という字の特異性に着目した。升という字は爬、登といった字と異なり、手足の動作という要素がないという。演習の中で戸倉が指摘したことだが、確かにそれまでの李商隠、温庭筠の詩では、熊は手（前足）を使った動作を行っている。李商隠詩は、その動作が獐猛な獣、勇敢な兵士という、『尚書』「禹貢」・「牧誓」などからくるイメージを連想させ、熊羆と大樹の実景は、兵士と大樹將軍の故事に結びつく一方で、さらに前句と対になって荒れ果てた屋敷をも表現する。一句の中の語が、複数のイメージを持ちつつ、語同士が複合的に関係しあつて、またイメージを形作つてゆく。

一方、梅堯臣は熊の手足の動作を捨象してしまった。熊は木の実でもとっているのであらうか、樹上にいるだけの、何でもない、ありのままの様子で描かれている。この、何のイメージも喚起しない熊の姿を描写したという点が奇想といえるのではないか。

梅堯臣の熊は、李商隠的な熊とは対極にあるように思える。李商隠は熊にイメージを付与していき、梅堯臣は熊について一般に通行している先行イメージを付与しない、もしくは捨象する。もしもこの熊の表現が典型的な李商隠の描写であつて、かつ李商隠的な描写が、それを範とする西崑体にも通ずるとするならば、第三聯の描写の持つ問題は、当時流行していた西崑体と宋詩の詩風を築いたとされる梅堯臣との関係という、文学史的な問題とも結びつきうるかもしれない。

一方、鹿については、前野直彬氏『風月無尽』（東京大学出版会、一九七二）によると、古代中国人の、イメージの定型化の問題として、「中国の鹿が、一つは呦呦たる声をもって天下泰平の象徴となり、一つは中原の鹿として政權争奪の比喩に転じ、ともに詩の世界における具象性を失った」ことがあるという。しかし飼われた鹿が水を飲む姿や野生の鹿の姿を描写した用例は存在する。

この点、温庭筠の二つの詩は、鹿を聴覚から描写した斬新で優れた詩であるといえよう。一方、「魯山山行」の場

合、鹿の描写そのものは珍しい表現とはいえない。しかし、「魯山山行」の鹿は、熊ほどではなくとも、『風月無尽』にも特殊な例として挙げられているように何か奇異な感じを起こさせる。

用例を見るに、詩における野生の鹿は山の奥深さを感じさせる効果を不可避的に持ち、時に詩人は意図的にその効果を利用している。ところが、「魯山山行」の第三聯は鹿が出る以上山奥のはずなのに、不思議と幽邃さが感じられない。鹿もやはり先行するイメージを捨象されているのではないか。

さらにこうした熊、鹿がおかれていた魯山は、「霜落」「林空」の状態にある。晩秋もしくは初冬の、魯山の実景ではあるかもしれない。確かにかかる状態でなければ熊・鹿を実際に見ることはできない、ということはある。また、野生動物が「霜落」「林空」で食物がないから「升樹」「飲溪」という行動にでるという因果関係をみることも或いはできるかもしれない。

しかしこの両句の風景描写はそれ以外の別の意図から出ているように思えてならない。「霜落」、「林空」は、「霜」と「林」を描きながら、まるでその存在を捨象してしまうかのような表現である。読者からすればこの二句から即座に「野情」を感じられるような情景描写になっているとはいえない。

第三聯に描かれた魯山の山中の姿からは、いかなるものにせよ、通行する文学的イメージを抱きにくい。作者の感情を反映する表現もない。しかし中国の古典詩には純粹な叙景詩は稀であることを考えると、こうした風景が、あるいは風景をこのように表現することが梅堯臣の「野情」にかなうものであったと考えられはしないか。そして、写実的な描写でありつつ、必ずしもそれと矛盾しないイメージまでも捨象した表現がなにか我々に違和感を与えているのではないだろうか。

## 五 第七句、第八句について

第四聯を検討する。笈氏訳では、「人家は一体どの辺りにあるのだろう。雲のむこうで鶏が一声鳴いた。」前野氏訳

では、「人家はどこにあるのかしら 雲の彼方で一声 鶏が鳴いた」とある。両者は全く同じと喋っている。私も異存はない。

問題は、この両句がいかなる感情を描写しているのか、また、詩全体のなかで意味的にいかなる位置づけがなされるべきか、ということであろう。鶏の声はこの詩で唯一、聴覚効果を持つ語であることもあり、何か特別な意味がありそうに思えるため、演習でも一つの論点となった。

梶村は雲、鶏を異世界への移行の象徴と捉えた。当初、白井は「魯山山行」詩を、一つの閉じられた世界と考え、「二声鶏」は詩という虚構の世界の終了を示していると考えた。これは一つの有力な考察であると感じられた。

しかし、私は、鶏の声によって第一句の感覚が破れる、という構成であるとは考えてはいない。人家が雲の彼方にあるというのは、すなわち、人家がはるか彼方にあることを意味するものと考ええる。これは、逆にいえば、梅堯臣の周囲には人家が無いことを示している。第四聯は、「この辺りには人家がない」という意味で捉え得る。

第四聯には、詩題からも連想されがちな、杜牧の「山行」のイメージがついてまわる。

遠上寒山石径斜 白雲生處有人家 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花

遠く寒山に上れば石径斜めなり 白雲生ずる處人家有り 車を停めて坐るに愛す楓林の晩 霜葉は二月の花よりも紅なり

(秋の寒々とした山に登ると、斜めにつづく石の小道／白雲が生じるこんな高い所にも 人家がある／車をとめて、何の気無しに夕ぐれの間林を愛でていると／霜を経た楓の葉は、二月のさかりの花よりも紅い。

梅堯臣がこの詩を知っていた上で、「魯山山行」第四聯のように、「人家在何許 雲外一声鶏」と表現するのは、自身あるいは読者の「人家は山のどこかにあるのだろう」という、「山行」詩から来る予想の否定を意図したものと考へうる。

また、魯山は、元魯山なる隠者と縁があることは、山崎が調べた。

隠者が住んでいそうな、清浄な山というのは、一般的な意味での野情と反するものではないであろう。しかし、魯山の、少なくとも彼の周囲には人家がない。人家がないことを宣言することで、隠者ゆかりの山なのに隠者を捨象する。梅堯臣が楽しんでいるのは、高潔な隠者すら存在しない「野情」である。この「野情」は、「わたしの」「自然を愛するところ・野趣」であり、そこからは一般に通行するイメージを帯びた自然表現は排除されている。

## 注

- (1) 笥文生『梅堯臣』（中国詩人選集二集、岩波書店、一九六二年）p. 36
- (2) 前野直彬『宋元明清詩選集』（中国古典文学大系19、平凡社、一九七三年）p. 8
- (3) 『梅堯臣』解説p. 10より
- (4) 陳新・杜維沫『歐陽脩選集』（上海古籍出版社、一九八六年）「遠山」詩の本文もこれによる。
- (5) 朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）や笥文生『梅堯臣』等による
- (6) 『中国・社会と文化』第八号、（中国社会文化学会一九九三年）所収
- (7) 李商隱の詩の本文は、『李商隱詩歌集解』（劉学鍇・余恕誠著、中華書局、一九八八年）に、温庭筠の詩の本文は、『温庭筠詩選』（吳通生選注、香港大光出版社、一九五九年）に、陸游の詩の本文は、『劍南詩稿校注』（錢仲聯校注、上海古籍出版社、一九八五年）による。